論文審査の要旨及び担当者

No.1

報告番号	甲　乙　第　　号	氏　名	ディーエル、グレゴリー

論文審査担当者	主　査	政策・メディア研究科委員 兼 総合政策学部教授　土屋 大洋
	副　査	政策・メディア研究科委員 兼 総合政策学部教授（有期）　梅垣 理郎
		政策・メディア研究科委員長 兼 環境情報学部教授　清木 康
		政策・メディア研究科委員 兼 総合政策学部准教授　神保 謙
学力確認担当者：		

本学位請求論文は、1955 年から 2011 年のシンガポール議会における政治家たちの討論のコーパス（言語資料）を作成し、それに基づいて、彼らがシンガポールを他者（他国・他都市）との関係でどのように自己規定をしてきたのかを明らかにし、集団的アイデンティティの形成を分析したものである。

人々が周囲の世界をどのように把握し、理解し、あるいは解釈するかを解きほぐすことは、相互接続された社会にとって不可欠である。しかし、しばしばアイデンティティを何か安定的で、永続的で、変化しないものとして捉えられる。これは、1959 年から同一政党が権力にあり続けているシンガポールでは特にそうである。しかし、アイデンティティのボキャブラリーは変化する。シンガポールの独立前後で起きたようにしばしば劇的な形で変化することもある。これは、世界が大きく変化していると認識されているときには、人々のコントールを越えた周囲の状況による変化なのかもしれない。しかし、人々は出来事に意味を見いだそうとする。解釈は人間の経験の中心となるものである。

集団的なアイデンティティは、その集団に固有の特徴によって理解されるのではなく、集団が自己と他者をどのように捉え、その間の関係をどのように認知するかに依存する。社会的なアイデンティティ・アプローチ、社会比較理論、そして参照グループ理論における研究から、集団的なアイデンティティの基礎となる中核メカニズムは、「社会比較」だと言われている。本論文は、自己と他者に関連する中核的な存在にまつわる意味論的な領域を研究した。意味を計測するために、そして、意味における変化を計測するために、これまでも様々な方法が使われてきた。例えば、1960 年代には共産圏の新聞記事の語数を数えたり面積を測ったりすることが行われ、1970 年代には認知構造図の手法が考案され、政策担当者や政治指導者によるテキストの分析が行われたが、そこには概念間のコーディングに伴う曖昧性が残されていた。その後、コンピュータの能力が向上し、またネットワーク分析の手法が発達することによって、語の共起（共出現）パターンをグラフ化する各種の手法（例えば KeyGraph など）が用いられてきた。本論文では、複雑なコンテンツ分析のコード化スキームを用いる代わりに、共起性とそのクラスターに焦点を絞った。しかし、本論文はすべての共起を対象とするわけではなく、特定の文脈を探求する概念的な枠組みを用いた。これは清木康らが「文脈依存意味論分析」と呼ぶものである。そして、意味の潜在的な構造と時間軸上の意味の変容を特定、可視化、分析するために対応分析（correspondence analysis）を利用した。

本研究の貢献は三つの点にある。第一に、テキスト分析の枠組み、特に文脈依存意味論検索と対応分析の統合を示したこと、第二に、方法論的なアプローチを使った実証的な研究を行ったこと、第三に、これらの研究を行うために作られた独自のデータ・セットを提供したことである。

論文審査の要旨及び担当者

本論文の構成は以下の通りである。第 1 章ではイントロダクションとして本論文の問題意識と概要を示した。その問題意識とは、シンガポールを題材とした本論文において、シンガポール議会のメンバーである政治家たちが、「我々は誰なのか」、「（比較対照となるべき）彼ら（他者）は誰なのか」、「我々と彼らの関係はどのようなものか」を探ることである。それによって、集団が自己と周りの世界をどう理解・解釈し、それが時間とともにどのように変化するのかを探ることが主たる課題である。

第 2 章においては先行研究についてレビューし、本論文の基盤を示す。関連する研究領域は、アイデンティティ、文化、認知など広範に広がっており、社会学、社会心理学、人類学、心理学などの分野に見られるが、特に、外交政策分析、政治心理学、国際関係論のコンストラクティビズムについて特に注目した。コンストラクティビズムは、国際関係が社会的に構成されていると考えており、それぞれの国家が自己と他者によって構成される社会をどう見ているかに注目している点が重要である。

第 3 章では、テキスト分析の手法を明らかにする。特にここでは「アイデンティティのボキャブラリー」を作ることに注力した。フランスの研究者ベングセリ（Jean-Paul Benzécri）らが開発した対応分析を中心にいくつかの手法を組み合わせることで（1）自己、（2）他者、（3）自己と他者の関係についての認知、を明らかにする手法を示した。また分析の素材となるコーパスは、1955 年から 2011 年の間のシンガポール議会で行われたすべての発言記録である。著者が収集し、クリーニングを行ったコーパスは、約 4100 万語、13 万 5000 の発言、413 人の話者を収めている（シンガポール議会は一院制で定員 94 人、任期は 5 年である）。これは印刷すれば 10 万ページ（毎日 200 ページを読んで 18 カ月分）になる。多民族国家のシンガポールでは、同一人物のスペルが複数ある場合があり、一番多い場合で 1 人に 26 通りのスペルがあった。これらをすべて整理し、クリーニングしたコーパスを作成した。

第 4 章では、シンガポールの政治指導者の変化に基づいて五つの期間を設定し、それぞれの時代においてシンガポールの政治家たちは「自己（自国）」をどう規定してきたのかを分析した。その結果、初期においては、マレーシアとの統合と分裂が大きな意味を持っていたが、その後はシンガポールの発展に伴って 1980 年代以降、異なる規定が行われることが分かった。

第 5 章においては、シンガポールの政治指導者たちが注意を払う重要な「他者（他国・他都市）」は誰なのかを特定した。独立前後のシンガポールが参照した国や都市は、東南アジアが主であった。しかし、その後は米国や英国、日本などが参照モデルとして出てくるとともに、香港や韓国といった当時の NICs（Newly Industrializing Countries：新興工業国）が多く登場することになった。

第 6 章においては、シンガポールのエリートたちが注意を払う重要な他者について語る際に使う「動詞」の分析を行った。つまり、どの国・都市を語るときにどのような動詞が結びつけられるのかを分析した。対応分析を用いることで、シンガポールのエリートによる国際環境の認識の構造に対する注意の構造を明らかにした。

第 7 章では、シンガポールとその他の地政学的な存在の間の明示的な社会比較を行っているシンガポールの政治エリートたちの約 1500 の文章を抽出した。シンガポールのエリートたちが最も比較に用いた二つの存在は、香港と日本であった。香港との比較は金融競争の言葉を含んでいた。香港はシンガポールと競争する場所と見なされ、シンガポールはそれに比肩するか追い越すべきとされた。日本との比較は「西洋」や「先進国」と

論文審査の要旨及び担当者

いった言葉を含んでいた。それはシンガポールがアイデアを借り、まねし、乗り越えようとする場所として認知された。

第 8 章の結論では、これまでの分析で特定した最大の比較言説のクラスターが、ランキングについての言説を含むものであることを指摘した。キーワード分析を用いてコーパスのそれぞれの期間について最も重要な言葉は統計的に何かを特定した。シンプルな頻度分析と合わせて、これは 1990 年以降、シンガポールにおけるエリートにとってランキングがますます重要になり、最新の期間においては、それは比較に関する支配的なモードになった。これは、社会比較や社会アイデンティティの文献において直接的に言及されていない最も重要な発見である。

ランキングの上昇とベンチマーキングの実践は、領域を越え、政治エリートから大学へ、組織へと広がる現象である。ランキングは客観的という認識があるものの、エリートたちはどのランキングにフォーカスするかを選ぶことができる。例えば、報道の自由より GDP の成長といった具合である。シンガポールにおける歴史的な軌跡は、1970 年代と 1980 年代において、エリートたちが地位の獲得（「西洋」のようになること）を気にしていたが、1990 年代までにエリートたちは、獲得した地位の維持とアイデンティティ管理をよりいっそう気にするようになった。

国際関係の文献の多くは、国際的なアナーキー状態と不安定状態を仮定する。国家は脅威の点で認知される。これは政策の分散に関する多くの文献を無視し、同盟に関する文献を過小評価する。不安定などの構造を仮定するよりも、もっとシンプルな方法でエリートたちによる国際的な環境の認知を計測することができる。これは、「アナーキー」が社会的に構成されていると議論するコンストラクティビズムの国際関係の研究者たちの理論的業績を拡張し、社会的構成のダイナミクスを計測する実証的なアプローチを示している。

コンストラクティビストたちは、国際関係、構造、アナーキーなどは、社会的に構成されていると主張している。しかし、こうした社会的構成を研究するだけでなく、そうした社会的構成がどの程度変化するのかについてのシステマティックな枠組みを彼らはほとんど示していないのが重要である。さらには、そうした社会的構成の過程を概念化するための基本的な枠組みを提供しておらず、単一アクターの仮定に単に依拠するよりも、これがどのようにして人々のグループによって達成されるかも示していない。本論文では、巨大なテキストからの知見を管理し掘り出す明白で実践的な方法を示すだけでなく、国際関係について人々が持つ認識を広範に研究する方法を示した。

シンガポールの自己規定は、独立前後の劇的な差異を示した。独立前にシンガポールがどのように理解されていたかは、その後にエリートたちがそれを、そして自分たちをどのように理解したかとは異なっている。独立前は、彼らはマレーシアと合併したがっていた。独立前の最も突出した存在がマラヤや、インドネシア、ブルネイ、マラッカ、ペナンといった地域の場所だったことを明らかにしている。合併が失敗し、シンガポールが独立国になったとき、エリートたちは「現実を受け入れる」よう強制されたに過ぎない。アイデンティティのボキャブラリーは、劇的な周囲の状況下で変化し得るし、他の時点ではこのボキャブラリーは共通の理解と枠組みを積み上げるかもしれないし、投げ捨てるかもしれず、もっとゆっくりと変化するかもしれない。マレーシアとの分離・独立の後、シンガポールのエリートたちが探したのは、彼らが学ぶことができる他者だけでなく、誰が競争者なのかを理解できる他者であった。

論文審査の要旨及び担当者

No.4

シンガポール議会討論コーパスの構築と、入手可能な多様なテキスト分析アプローチとソフトウェア・プログラムの精査も本論文の重要な貢献である。計算力の裏付けとテキスト入手可能性が魅惑的である一方で、そうしたデータを研究に合致するフォーマットに純粋に研磨する作業は圧倒的な量になった。本論文のコーパスは、シンガポールにおけるエリートと政治のいっそうの研究に用いることができる。シンガポールにおける政治的な認識と言説をシステマティックに分析する業績はほとんどない。このコーパスは、より多くのメタデータを付与することによって、シンガポールにおける社会構造とエリートに関する広範な疑問に答えることを可能にするだろう。このコーパスは、EUや米国のような他の議会や、アイルランド、英国の議会の同様のコーパスと比較研究ができるような英語のコーパスとして使うこともできる。

しばしば、シンガポールを研究する意義について疑問が投げかけられる。多様な理由からシンガポール研究は一般的に無視されている。東南アジア地域の他の国々が保有する文化的な遺産の古めかしさがシンガポールには欠けており、また研究者が研究するための資金を呼び寄せる貧困もない。とても小さく、簡単に無視することもできる。しかし、研究者たちがシンガポール研究を無視する一方で、あらゆる国の政府官僚たちがシンガポールを羨望の目で見ている。シンガポールは小さいかもしれないが、エリートたちが同じ言語を話すグローバルな政治文化が今日そこには存在する。彼らはガバナンスと政治に関する共通のボキャブラリーを共有する。中国、ロシア、ルワンダ、ドバイその他のエリートたちは、シンガポールにガバナンスのモデルを見る。そこに見るべき何かを見いだすことができる場所である。経済成長、党の安定性、そして外国人が過剰な騒ぎを起こすのを遠ざけておくのに十分な民主主義がある。シンガポールは、シンガポール・モデルと呼べるような国家のモデルとなっている。

そして、シンガポールにおけるガバナンスのモデルは、権威主義、一党独裁国家ないし権威主義体制のエリートだけではない。米国、英国、その他の「発展した」民主主義国家の政府官僚たちがシンガポールに来るとき、典型的にはシンガポール政府が費用を負担する会議だが、彼らはそこで先進的な市民サービスと、政策実施を麻痺させるような敵対的政党政治のない穏やかなガバナンスの形態を見る。これらの公務員たちにとっては、シンガポールではすべてが簡単に見え、ガバナンスが「非政治化された」より良いテクノクラート的未来を指し示している。

選挙で選ばれた公職者であろうと、そうでない官僚であろうと、政治エリートたちの信念、理解、認識を探る研究は、シンガポールでもどこでも重要である。彼らの思考法や、彼らが世界をどう見て、どう語るか、ブリュデュー（Pierre Bourdieu）らが呼ぶところのハビタスとは何か、そして、アナール学派がメンタリティと呼ぶものとは何かを理解できることは重要である。毎日の市民の習慣とメンタリティがエリートに与える影響を説明する方向での研究には資金が付くことが多いが、反対の方向でもっと多くの仕事がなされる必要がある。つまり、すべての他の人たちに対するエリートたちのメンタリティの説明である。

本論文の限界を挙げるとすれば、実際のシンガポールの政治との接点が薄いことである。つまり、「データに語らせる」ことに重きを置いているため、歴史的な記述によってその分析を補うことが十分に行われていない。現実の歴史との整合性がもっと述べられていれば、分析の有用性を補完でき、読者により説得的な説明を提供できただろう。しかし、だからといって本論文の手法と分析そのものに欠陥があるわけではない。

論文審査の要旨及び担当者

No.5

以上、本論文は、非欧米圏における最大の政治言語に関するコーパスを作成し、それを最新のテキスト分析の手法を駆使することでシンガポールの集団的アイデンティティを分析したものであり、いわゆるビッグデータに関する分析手法を政治／国際関係分野に応用したソーシャル・コンピューティングを導く SFC らしい研究として評価できるものである。本論文の枠組みと手法は他の国政治分野にも応用可能であり、SFC や慶應義塾大学、そして、社会全体への展開を通じた成果によっても高く評価できる。以上により、本研究を通して、著者は先端的な研究を行なうために必要な高度な研究能力、新たな研究領域を切り開く発想力、並びにその基礎となる豊かな学識、および、研究成果を社会貢献へ結びつける能力を有することを示した。したがって、本委員会は、本論文の著者は、博士（政策・メディア）の学位を受ける資格のあるものと認める。